



特集 メディアが生み出す神々

現代メディアにおける「神話」

はじめに

何でも分析して理解しようとする科学の時代においても、やはりどうしても割り切れない事象がある。しかし、それでも理解した気になって安心は得たい。ところがその際、もう今更、宗教や信仰には戻れないと感じる人々が少なくない。そこで宗教や信仰より緩くて逃げ場がある神話が、理屈ではない安心感や幸福感を与える格好の道具として利用されているのではないだろうか。昔のような力を持てなくなった宗教や信仰に代わるものとして、現代人と現代メディアに選ばれたイメージが新しいタイプの神話ではないかという見通しを、臨床心理的なもの、

ディズニー的なもの、近未来世界的なもの、そして現代メディア神話の二面性の問題などを例に考察してみたい。しかし個体化や内面化が進む現代においては、かつてのような集団を熱狂させる「大きな神話」は成り立ちにくい。現代メディアにおける神話とは、見えにくい「小さな神話」とならざるを得ないだろう。

一 「神話」の受容

私は神話について一九九九年に『神話学講義』と『女神の神話学』という単著を出したが、それ以後はない。神話を学問的に論じる本は売れないらしい。他方、監修ということになると毎年、必ず一冊、場合によってはそ

まつむら かずお

松村一男

れ以上の依頼がある。⁽¹⁾ どうも現代における神話はメディアにおいて受け入れられる形態が決まっていると思える。ムードやお手軽な知識としての神話には大いに需要があるが、理論的にどうなのかという難しい問題になるとさほど関心は集まらない。以下では、現代メディアで流通している「神話」という捉えどころのない現象の持つ意味をいくつかの側面から考察していくことにしよう。

少し前にヤフーで「神話」という語をサーチしてみたことがある。すると、一七九〇万件というとてもない数字が出てきた(二〇〇七年八月二十四日現在)。最初に目に入ってきたのは、ジャッキー・チェン主演の「The Myth 神話」という「SFスペクタクル史劇」映画のDVDの宣伝であり、その次は、「シンファ Shinwa 神話」という韓流のイケメンの六人組みのボーカルユニットの宣伝だった。「神話」という、永遠不朽の真理を語るというイメージさえある用語についてのサーチなのに、流行物がまず出てくるのはネットというメディアの宿命かも知れない。しかし、それだけではなく「神話」も現代文化においては他のすべての事象と同様に消費財

としての位置づけしか与えられないということなのだろう。「神話」本体に入る前にこういう宣伝がまず情報として与えられるという図式には、現代のメディアの中で「神話」というものがどう位置づけられているのかが典型的に現れている気がする。

SFスペクタクル史劇が「神話」と呼ばれることは常識的な用法を逸脱している。またボーカルユニットが「伝説的」に有名になることはあるかも知れないが、「神話」にはならないだろうし、そのユニット自体の名前が「神話」である必然性はない。つまり、ここでの「神話」という語は辞書的な定義とは関係なく、他とは異なる別格さという、ある種の特権的ムードを醸し出すために選ばれているに過ぎない。こうしたことは、現代メディアにおける「神話」の多くがムード作りの一環に過ぎないだろうと予感させる。

さてネット上の「神話」本体となると、まずはウィキペディアの「神話」の項目だろうか。しかし、日本語のそれは英語のものと比較すると圧倒的に貧弱である。英語版は専門家から見れば問題点もなくはないが、普通の

百科事典の項目としては及第点である。瞬時にある分野の概要を知りたいのなら、これでよい。しかし、日本語版は内容もリンクも物足りない。最初に出てくるのも、冒頭に触れたDVDと韓国グループのサイトへの案内だ。完全に本体が負けてしまっている。私自身の神話関連書の出版状況とも考え合わせると、案外と神話研究の現状を的確に示しているのだろう。

二 宗教学からの応答

結局、神話という語は現代社会ではある種のムードを醸し出す際に都合よく使われているらしい。そこで研究者として取るべき道は二つあるというか、二つしかない。神話という語のメディアにおける乱用に憤慨し、伝統的な神話の研究を続けるのが一つ。そして価値判断は一時的に棚上げにして、神話という語の用法に著しい変化があることを認め、現代文化の中で「神話」という語がどのように使われているかを研究すべきと考えるのが二つ目である。

後者のように考えるに到った研究者は近年、私も含め

て少なくない。そこで、二〇〇六年度に東北大学で開催された第六五回日本宗教学会学術大会では、何人かの神話研究者を募って、「宗教学と神話研究——方法的な多様性をめぐって——」というパネルを設けてみた。⁽²⁾ また、宗教学論叢の一冊として、やはり現代における神話の役割に関心をもっている筑波大学の山中弘氏と一緒に、「神話と現代」という論集を出版した。⁽³⁾ これらにおける検討の結果についてはそれぞれを参照していただきたい。

しかし、こういう学術的な現代社会における神話概念の展開の研究も、ネット上での「神話」という語の使用例に充分に対応しきれていない感がある。乱用は止めて、節度ある使用をしましょうと言ったところで、誰も耳を傾けはしないだろう。電車の中での携帯やヘッドフォンのマナーについての呼びかけと同じだ。事態は勝手に進んでいくので、誰もそれを止められない。

今、私が現代メディアの中の神話を考える上でカギになりそうと感じているのは、「幸せ」という感覚である。「特別」でも「エリート感」でも構わないが、そこ